

## 大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：王 暁（臨床心理研究コース）

<b>■ 研究題目</b>
中学生の過剰適応に関する日中比較 ーソーシャルサポートの受領と期待に注目してー
<b>■ 研究代表者・分担者 氏名</b>
王 暁（臨床心理研究コース）（代表者）
<b>■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）</b>
<p><b>1. 問題と目的</b></p> <p>過剰適応とは、環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や要求に応える努力を行うことである（石津，2006）。石津（2008）によれば、過剰適応傾向の高い者は、保たれている社会的適応の陰で個人的な苦悩を感じている可能性や、個人の苦悩の一方で保護者をはじめとする環境側からは「適応している」と評価される可能性が指摘され、その点において非適応的であることがわかってきている。したがって、過剰適応傾向の高い者は将来的に不適応に陥る可能性が高いと考えられる。</p> <p>ところで、児童生徒の学校不適応を緩衝する要因として、ソーシャルサポートが取り上げられている（石津，2010）。「ソーシャルサポート」は、ある人を取り巻く重要な他者（家族、友人、同僚、専門家など）から得られるさまざまな形の援助（support）であり、その人の健康維持・増進に重大な役割を果たす概念である（久田，1987）。しかし、援助行動に関する社会心理学的研究では、他者から援助を受けることは、必ずしも心身の健康にポジティブな影響を与えているだけではない。石津（2010）によれば、サポートの受け手と、提供されるサポートの量や種類のマッチングが悪い場合、実行サポートがネガティブに作用する場合があると指摘している。期待よりも受容したサポートが少ない場合、ストレスに対する対処が困難になり、自尊心の低下や抑うつにつながる。また、逆に期待よりも受容したサポートが多い場合にも、過剰に援助されることで自身の能力が低いことの証明となり、自尊心を低下させ抑うつを高めることが示されている（Nadler&amp;Fisher，1986；中村・浦，1999）。</p> <p>これまで、日中両国の過剰適応傾向者に対して、どのようなサポートが有効的な働きをしているか、また期待と受領との不一致は心理的健康に影響を及ぼすかどうかについて明</p>

らかにされていない。そこで、本研究では、日中両国の過剰適応傾向者におけるサポート受領・期待・ズレと精神的健康との関連を検討する。また、両国の結果の共通点と相違点を明らかにし、今後の両国における過剰適応者への心理臨床的援助につながるために知見を示唆することを目的とする。

## 2. 実施内容

中国 A 市の公立中学校一校の生徒 350 名と日本 B 市の公立中学校 2 校の生徒 208 名に質問紙調査を実施した。質問紙は、①フェイスシート（学年・性別）②中学生用過剰適応尺度（石津，2006）③ソーシャルサポート受領尺度（細田・田嶋，2009）④ソーシャルサポート期待尺度：細田・田嶋（2009）によって作成されたソーシャルサポート尺度を一部改変して用いた。⑤GHQ-12 尺度（中川・大坊，1985）に構成されている。分析には SPSS Ver.21.0 を使用した。主に、クラスタ分析で得られた 4 つのクラスタのサポート受領・期待・ズレと GHQ との相関係数を日中それぞれ算出した。

## 3. 結果

### (1) 日本の過剰適応群におけるサポート受領・期待・ズレと GHQ との関連

日本の過剰適応群では親、友だちのサポート受領、先生道具的サポート受領と先生情緒的サポートが GHQ との正の相関を示した ( $r=.40\sim.58$ ,  $p<.01$ )。すべての対象に対してサポート期待が GHQ と有意な関連が見られなかった。親道具的サポートズレ、親情緒的サポートズレ、友だちと先生の情緒的サポートズレが GHQ と負の相関を示したが ( $r=-.32\sim-.47$ ,  $p<.05\sim.01$ )、親共行動的サポートズレ、友だちと先生の共行動的、道具的サポートズレと GHQ に有意な関連がみられなかった。

### (2) 中国の過剰適応群におけるサポート受領・期待・ズレと GHQ との関連

中国の過剰適応群では親道具的サポート受領、親情緒的サポート受領、友だちサポート受領、先生情緒的サポート受領が GHQ と正の関連を示したが ( $r=.25\sim.36$ ,  $p<.05\sim.01$ )。親共行動的サポート受領、先生共行動的サポート受領、先生道具的サポート受領は有意ではなかった。すべての対象に対してサポート期待が GHQ と有意な関連がみられなかった。親情緒的サポートズレ、友だち共行動的と道具的サポートズレ、先生道具的と情緒的サポートズレが GHQ と弱い負の相関が示されたが ( $r=-.23\sim-.31$ ,  $p<.05\sim.01$ )、親共行動的と道具的サポートズレ、友だち情緒的サポートズレ、先生共行動的サポートズレは有意な関連が見られなかった。

#### 4. 考察

##### (1) 過剰適応傾向者におけるサポート受領と GHQ との関連についての日中比較

サポート受領と GHQ との関連について、日本の過剰適応傾向者はすべての対象からのサポートと精神的健康とは正の関連をもっていることが示された。一方、中国の過剰適応傾向者は友だちからもらったサポート、親道具的サポートと情緒的サポート、先生情緒的サポートと精神的健康と正の相関が見られたが、親共行動的サポート、先生共行動的サポートと先生道具的サポートは精神的健康に影響が及ばないことが示された。つまり、日本の過剰適応傾向者に対して、家族内（親）、学校内（友だち、先生）の様々なサポートは精神的健康とポジティブな関連を示したが、中国の過剰適応傾向者に対して、親と先生の共行動的サポートより、情緒的サポートが最も有効に作用することが示唆された。中国の社会文化では、教師は尊敬されるべき、礼儀的に付き合うべき存在であると認識されている（翟，2006）。翟（2006）は中国の中学生の学校忌避感を抑制する要因は、友人との関係よりも教師との関係であることと確認されている。生徒は教師が自分に対し関心と期待をもつと感じると、自分が認められ、自分は価値のある人間だと認識、自我価値観のレベルを高くする効果がある（翟，2007）。また、中国では親に対する期待も大きく、特に学業に対する厳しいという現状は広く存在し、両親の関心と励ましは子どもの学習することに対する積極性を促進するだけでなく、個人の適応を支えることができると考えられる。

##### (2) 過剰適応傾向者におけるサポート期待と GHQ との関連についての日中比較

サポート期待と GHQ との関連について、日中ともサポート期待と精神的健康との関連がないことが示された。それは石津（2010）の研究で他者志向的である過剰適応の高い子どもが知覚されたサポートがそのままサポート効果として機能するとは限らないことと一致していた。

##### (3) 過剰適応傾向者におけるサポートズレと GHQ との関連についての日中比較

サポートズレと GHQ との関連について、日本の過剰適応傾向者は親道具的サポートズレ、すべてのサポート源の情緒的サポートズレは精神的健康とは負の相関を示した。中国の過剰適応傾向者は親と先生の情緒的サポートズレ、友だち共行動的と道具的サポートズレ、先生道具的サポートズレは精神的健康とは負の相関が見られた。

共通点に関しては、日中両国の過剰適応者とも目上の人（親、先生）からの情緒的サポート受領と期待とのズレが高いほど精神的健康度が低下する可能性が示唆された。過剰適応傾向者は他者の態度に対して敏感で、特に高地位者が否定的な評価を持たれて困るためより過剰に気にする可能性がある。「あなたに何かうれしいことがあったときに、自分の

ことのように喜んでくれる」「あなたの良いところをほめてくれる」といった情緒的サポートが自分の価値を認め、自尊心を高めることができると考えられる。サポート欠如によっておこるサポートの期待はずれの場合、見捨てられ不安を高まり、心身の健康にネガティブな影響を与えると推測できる。

相違点に関しては、日本の過剰適応傾向者は親道具的サポートズレと精神的健康度の低さに関連しているが、中国では、友だちと先生道具的サポートズレは精神的健康度との負の関連が見られた。日本の中学生にとって、両親からの関わりが自他への肯定感にとって重要なものである（細田ら，2009）。荘厳（2008）は、日本が基本的に「世間」を気にする集団的意識の社会であるのに対し、中国は基本的に家族集団主義の社会であることを指摘している。末田（1993）の中国人が持つ面子の概念に関する事例調査では「留学したら、何もしないで帰れない」、「大学に入らないと本人も家族も恥ずかしい」などの事項を書いた学生もいて、家族の前にも面子を保つことの重要性がわかってきた。このように、「進路や勉強のことでアドバイスをくれる」「個人的な悩みごとについて話し合う」といった道具的サポートを家族以外の人に求めやすいと考えられる。ところで、その期待をみたさない受領はより強いストレスとなり、適応状態の低下もたらず可能性も考えられるだろう。

## 5. 今後の課題

先行研究によれば、被援助者が課題を一人でこなすことができない無力な存在であることを暗示してしまい、そのことがその人の自尊感情にとって脅威になりうる可能性が指摘されている（石津ら，2010）。他者から評価に敏感である過剰適応傾向者に対して、実際に援助を申し込むことに抵抗感がある可能性が考えられる。自分自身での問題解決が不可能な状態に陥った場合、どうやって周囲の援助者に適切に援助要請をするのかについてより詳しく検討していく必要があるだろう。